

出会いと再会

依岡 絢子

今年の夏は連日 猛暑、猛暑、高齢のせいかなと思っていたら異常気象だったという。日本列島いや地球は大丈夫だろうか。

同窓会に出席します。六十年ぶりに再会し感激の場面もありそうで楽しみです。

私は平成七年三月に四十年間勤めた小学校教員を定年退職しました。児童、保護者、同僚など、沢山の人の出会いがあり絆を結んできました。

退職して十八年目、銀幕シネマの場面は第二章に入り終末期に向かって歩いています。

夫も教員で、私より二年早く定年退職して書道一筋の道を歩いていて紫峰（夫の号）書道会の教室を開いていました。私は退職と同時にその教室に入れてもらいました。筆の友書道会へも入り十年位かかって師範をいただきました。年間五、六回書展へ出品します。作品づくりに追われています。今年は夫主催の第十一回

啐啄そったくの書展を 九月二十七日〜十月二日まで 高きました新画廊で開催します。
八月中旬に作品を表具店に出し案内状、作品集、展示プランなど準備できました。
大忙しだったので「くろしお」の原稿が遅れました。

高知県西南端に位置する幡多郡大月町へ嫁いで行き、最初に赴任した小学校が平成二十一年三月に閉校しました。丁度私たちの結婚五十年の結婚の年でした。夫は「閉校の碑」の文字を頼まれて書き立派な碑が出来ました。私たちは前庭の一角に閉校と結婚の記念に歌碑を建てました。

潮騒と 野路菊の 群れに守られて
母校よ 永遠に 輝きてあれ

書 依岡 稔（紫峰）

歌 依岡 絢子

夫が私の短歌からこの一首を選んで筆で書いてくれました。生きて来た証です。記念式典で還暦になった教え児十名と再会し幸せな日となりました。

さて、第二章のハイライト。それは思いがけない友との再会。一昨年、五十七

年ぶりに青嶋（旧姓坂本）武子さんが唐突に、「もう忘れているかも知れないけれど。」と東京から電話をくれました。受話器から流れてくる声は確かに武子さん。忘れてなんかいません。なつかしい声でした。よう電話をかけてくれました。二月九日の同窓会の日に再会することを約束しました。

さっそく同窓会名簿やアルバムを探しページをめくりました。運動会の仮装行列で武子さんがお宮、私が貫一、手をつないで運動場を一巡した写真、宇佐から巡航船へ乗り浦ノ内湾の風景を楽しみながら武子さんのお家へ行った時の写真など、コピーして私の家族の写真も入れて郵送しました。再会の日まで文通、電話で連絡をとり合いました。

二月九日レストラン「どんと」で再会しました。学生時代の面影があり一瞬に五十七年の空白の時間が埋まりました。昼食後、神田の拙宅へおいでもらって三泊四日の合宿が始まりました。

夕方から「ラ・ヴィルフランシュ」の同窓会へ行き二十名位の集いの中で歓談しました。拙宅へ帰り夜更けまで語り合いました。

二日目、伊野部（旧姓野田）敦子さんを誘って母校訪問、新校舎の説明を池上

校長にしていただき お茶室「向陽庵」へ入らしてもらいました。私たちの時は大嶋校長宅で奥様にお作法を教えていただいたことを思い出しました。

その後、土佐北原の野田旧邸、横浪の武子さんの実家、横浪スカイラインを通り中岡慎太郎像の側の入交さんのログハウスを見て萩の茶屋で貝を焼き磯の香を堪能して帰ってきました。

三日目は牧野植物園、新港、岡豊の垣内（旧姓森田）節子さん宅を奇襲訪問、長さ三十七センチ余の立派なお大根を一本づついただいて歴史民俗資料館で研修しました。

四日目は午後の飛行機で帰られるというので近くの粉もんやで昼食後、敦子さんに挨拶して空港へ。夕方七時半頃、着陸したと電話があり、ほっとしました。過密な日程で疲れたことでしょう。敦子さんもずっと一緒に三人は学生時代にかえって話に花を咲かせ、笑い、はしゃいで、楽しい三日間でした。

第二章に入って教え児や同僚との再会が次々とあり幸せをかみしめています。ゆっくりこつこつと書の道を歩き、今までに出会った人たちとの再会を期待しながら生きていきます。

